

氏 名	北 原 寛 子
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 5193 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項
学 位 論 文 名	Buidungsroman概念の成立と変容
論文審査委員	主 査 教 授 廣 瀬 千 一 副 査 教 授 寺 井 俊 正 副 査 教 授 三 上 雅 子

論 文 内 容 の 要 旨

従来Bildungsromanという概念は、この用語によって総括される特定の小説群をさして、つまりドイツ文学で伝統的に継承されてきたジャンルを表記する語として使用されてきた。しかしこのジャンルを客観的に定義することを試みた研究では、それまでこのジャンルに含まれてきた作品の多くを除外せざるをえないか、反対にこのジャンルから除外されてきた作品を含めざるをえなくなるかのいずれかであった。だが議論の過程で生じたこれらの問題を無視する形で、最終的には従来通りの主張が繰り返されてきた。本論はこうしたBildungsromanをめぐる議論の矛盾に注目し、Bildungsromanを小説ジャンルではなくイデオロギーであるとしてとらえなおして、この独特の小説観が形成されるにいたった過程を1700年から1900年の200年にわたるドイツ語圏の小説理論を分析して明らかにしている。

第一章ではおもに18世紀のドイツ語圏で起こった小説観の大変革を取り上げている。当時小説は非道徳的・非合理的と非難されたので、小説擁護論者たちは小説のありうべき姿を求めて議論をおこなった。その結果、合理的な筋を備え、かつ読者に教育的な影響を与えるという理想の小説像が生み出された。この時代に形成された理想の小説像が、現在のBildungsroman概念の基礎となっている。

第二章および第三章では、18世紀の理想の小説像が当時の小説の実態をあらわしたテキストとして誤読されていく18世紀末から20世紀初頭までの変遷を追っている。19世紀には18世紀的な理想の小説像は『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』に実現されていると考えられたが、『修業時代』を賞賛する一派と、その影響への抵抗を試みる一派の争いが、19世紀の小説論を規定している。ディルタイはBildungsromanという概念を提唱したが、これは18世紀から継承されてきた理想の小説像につけられた新しい名前である。新たに名前を獲得したことで、18世紀の理想の小説像は今日まで生き続けた。

第四章では、従来のBildungsroman論で中心的に取り上げられてきた4作品（ヴィーラント『アガトン物語』、ゲーテ『修業時代』・『遍歴時代』、トーマス・マン『魔の山』）を取り上げ、作品解釈を通して本論の主張するBildungsroman概念を検証している。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

ドイツ文学史では、Bildungsroman（通常「教養小説」と訳される）はきわめて重要な文学範疇であり、その代表作はゲーテの長編小説『ヴィルヘルム・マイスター』だというのが定説となっている。しかしその概念の中身は実は一定しておらず、時代と共に変遷し、加えて、どの作品がBildungsromanに該当するかについても見解の一致を見ていない。近年ドイツ文学研究では、とりわけ近代ドイツ文学史の見直しが進んでおり、それに伴い、Bildungsroman概念の再検討もおこなわれつつある。本論文はこうした研究状況を踏まえた上で、そもそもBildungsromanとは何か、というテーマを設定し、この概念の成立とその変容を、18世紀後半から20世紀前半

までの当時の歴史的資料に基づいて検証している。こうした検証を通じて、Bildungsroman概念が歴史的に一貫性を持った概念なのか、またこの概念とこの概念規定の範疇に入るとされる小説の実態とが整合しているのかという点について、詳細な考察をおこなっている。本論文の構成は、「序章」「第一章 18世紀における理想の小説像の形成過程」「第二章 18世紀小説論と『修業時代』の融合過程」「第三章 18世紀的小説論からBildungsroman論への変容」「第四章 Bildungsromanとされる作品の非Bildungsroman的解釈の可能性」および「終章」からなっている。論者は、18世紀になって「理想の小説」像が形成されていく過程を、主としてブランケンブルクの『小説試論』を検討することによって明らかにし、さらに19世紀に至ってこのブランケンブルクの「理想の小説」論がモルゲンシュテルンによって継承されつつBildungsroman論へと発展させられ、さらに19世紀末から20世紀初めにかけて、ディルタイのきわめて精神性の強いBildungsroman概念に結実していく過程を、克明に追っている。そしてこの過程で、Bildungsroman概念が娯楽小説などを排除しつつ、小説の実態と離れたところで理論構築され、精神主義的傾向を強めていった経過と状況を明らかにしている。Bildungsroman論を18世紀小説論の延長線上にとらえる本論の視点は、今までの研究にないきわめて斬新な発想に基づいており、高く評価できる。Bildungsroman論に関するこのような視点からの包括的研究は日本ではいまだなく、その意義はきわめて大きい。これらにより審査委員は全員一致して本論を意義のある優れた論文であると判断した。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。